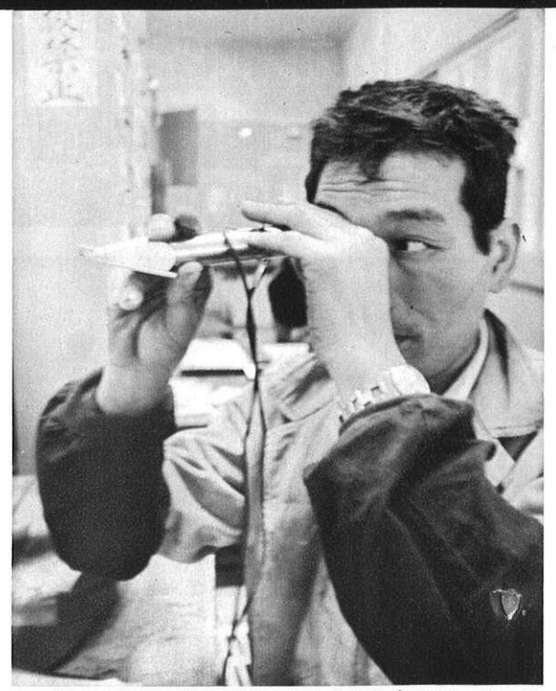
甘夏みかん

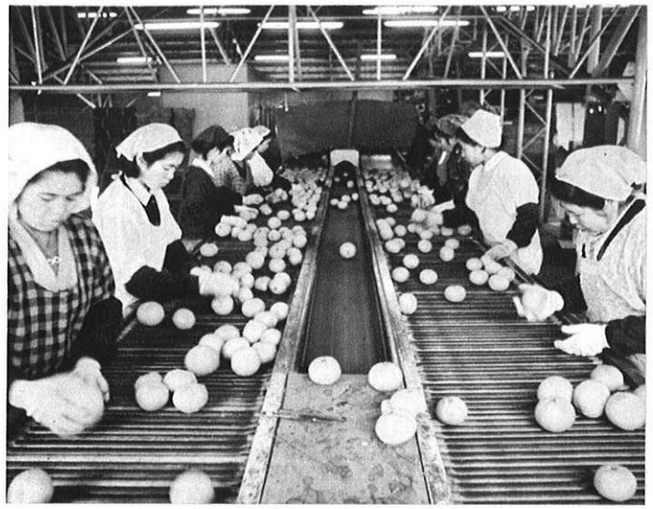
—芦北郡田浦町にて—

質量ともに日本一を誇る熊本の甘夏みかん。田浦町を中心に、芦北地方ではいまが出荷の最盛期。海沿いのこの地方は、甘夏栽培に最適の条件をそなえ、面積も生産量も年々約３０％の伸びを示し質の改良など生産技術の向上はもちろんのこと、設備の近代化もめざましい。なかでも画期的なものとして、田浦町に県内ではじめてのモノラックが導入されたことである。これは従来の索道に比べて経費も安く、能率的でさしずめ動く道路といったところである。生産量は5,400トンで、出荷は東京、大阪などの大消費地を主に、ことしからは北海道へも販路を広げている。



上・程よい甘味と風味が甘夏みかんの生命だが、それだけに糖度の検査はきびしい（甘夏の糖度は10—11度ぐらい）

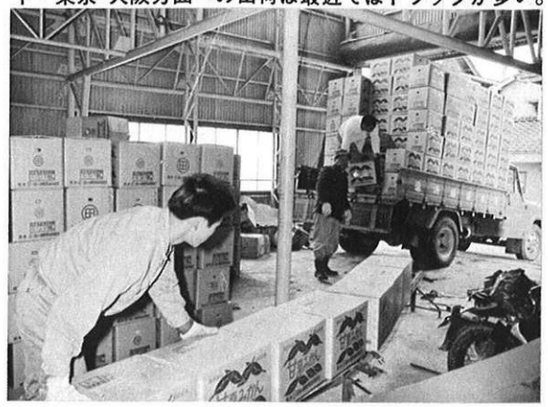
下・選果場の施設もだんだん大規模になってきた。



上・昔ながらの索道にとってかわったモノラック。熊本では初めてというこの運搬施設は採集や運搬で大活躍。

下・海沿いの段々畠は見事な甘夏みかん園と化した。

下・東京・大阪方面への出荷は最近ではトラックが多い。



神風連と西南役

くまもとの明治百年（その3）

山口白陽

明治百年の熊本を顧みて、最も大きな活字に組まるべき事件は、明治九年の神風連の変、引続く十年の西南役にとどめを刺すであろう。太平洋戦争なども、その被害の度においてはこれに勝るとも劣るものではないが、それが全国的なものであるのに比して、この二つの事件は熊本を舞台として展開したのであり、熊本人がキャストの大きな部分を占めているからである。

まず神風連について——。

熊本人の性格を語る時、よかれあしかれ第一に挙げられるのはモッコスということであるが、神風連の変こそ正にそのモッコス性の爆発と見てよいであろう。

いうまでもなく、当時（一八七六）は明治維新の産後幾何もない時である。いわゆる後産（あとざん）の苦しみはまだ至るところに尾をひいていた。俸禄をはなれた士族の処遇ということはその主要な一つであり、彼等の胸中に満々たる不平不満のあったことは想像に難くない。社会的地位の転落、経済生活の傾斜、そこへもってきて滔々たる西欧文化の侵入、廃刀令、断髪令、信教の自由等々右を見ても左を見ても封建時代に築き上げた楼閣は次から次へ崩壊してゆく。

そうした事態は、これら旧士族、特に当時神職に携わった人々や国学に傾倒した人々にとって〝神国日本〟の没落を意味する我慢のならない成行きであった。事をここに至らしめたものは何か、「それは欧化第一主義の新政府である、歴史も伝統もふみにじって、ひたすら毛唐どもに心酔し、追随する悪政の所産である」——。

この鬱屈した怒りは遂に爆発した。

明治九年十月二十四日夜、首領太田黒伴雄以下百七十余人の神風連（敬神党）は一斉に蜂起して、当面の敵たる県庁と鎮台に矛先を向けた。

権令安岡良亮、司令長官種田少将らをはじめ顕官たちはその邸に殺され、兵営もまたその急襲を受けて混乱したが、近代火器をもった三千の城兵と刀槍を武器とした二百足らずの神風連では、勝敗は事前から歴然たるものがあった。一夜のうちに暴動は平定し、市民は安静した。

しかし、この慌ただしい一夜の悪夢によって、敵味方——それは同じ日本国民である——ともに多数の死傷者を出したことは、あまりにも貴重な代償というべきであった。

神風連については毀誉さまざまな批判がある。九十年後の今もなお賛否両論は続いているといってもよい。先に述べたモッコス精神の信念に徹した愛国心、成否を度外視しても決行せざるを得なかった純粋な情熱、それらを讃えるもののある一方、科学性を欠いたアナクロニズム、目的のためには手段を選ばぬ暴力、それらに対する反撥のあるのは当然のことであろう。

神風連の変に対して、翌十年に起った西南役は、そのスケールにおいて比較にならぬ大規模なものであった。

南洲・西郷隆盛を総帥と仰ぐ薩摩の兵児一万三千が、大挙して熊本城下に迫ったのは二月二十日、神風連の暴動から僅かに四カ月の後である。

これよりさき、明治六年におこった征韓論に敗れた大西郷は、職（陸軍大将）を辞して郷里鹿児島に帰り、麾下の諸将多くこれと行を共にしたが、これは文字通り虎を野に放つものであった。果然、政府に訊問の筋ありとして蹶起した薩軍は、折からの雪をけって東上の途につき、先ず最初の関門熊本城を血祭りにあげようとしたのである。

城を守るものは少将谷干城以下三千の将兵であったが、兵火に先だって不審火のために天守閣以下殆んど焼亡し、飛火は城下の民家に移って熊本は焼野原となってゆく。

そうした中で両軍の死闘は間断なく続けられ、名高い田原坂の血戦をピークに、城の内外到るところに血の雨がふった。

援軍の到着によって、熊本城の包囲が解けたのは四月十五日、五十余日にわたって城下数万の市民に生きた心地もなく、大方は郡部に疎開して終戦の日を待った、それは太平洋戦争での空襲の日日より決して安易なものではなかったはずである。

しかもこの事変には、県下の旧士族で薩軍に呼応するものの少くなかったことが、更に複雑な色彩を添えた。池辺吉十郎、佐々友房、宮崎八郎等々の名がその中に出没する。

結果は周知のとおりで、同年九月大西郷が城山で自刃したのをエピローグとして、西南役は終結を告げたが、この間における官薩両軍の貴重な犠牲は莫大なものがある。

しかし、この戦いを明治維新最後の内乱として、新政府の施策はようやく軌道に乗った。勿論熊本にとっても新時代への曙（あけぼの）がきたのであった。

（「呼ぶ」主宰）

編集室から・次号は私たちと道路というテーマで道路問題を特集します。このほかに、新年度予算の解説や、明治百年シリーズのためのグラビア特集などを予定しています。